様態と結果の副詞的表現の情報構造上の特性[1]

難波 えみ[2]

DOI: 10.18999/stul.32.45

要約：コーパスは産出された言語の資料であり，聞き手への情報伝達機能を有していると考えることができる。本研究では難波・玉岡（2016）の新聞コーパスを用いた副詞的表現の分布について様態と結果の副詞的表現が情報伝構造上どのような特性を有するのかを検討した。副詞的表現の省略可能性をテストし，次のことを結論した。様態の副詞的表現は情報構造における重要度が目的語と常に相対的に決められるといえる。そして，様態の副詞的表現と目的語の重要度の決定は書き手に依存すると考えられる。一方で，結果の副詞的表現は情報構造において絶対的に重要度が高く，なおかつ，動詞のような述語的情報を担うと考えられる。本研究で検討した副詞的表現の情報構造上の特性は難波・玉岡（2016）で示された様態と結果の副詞的表現の分布について情報構造の観点から説明づけられると思われる。

キーワード：様態　結果　副詞的表現　情報構造　省略　重要度

1. はじめに

本研究では，動詞句に関わる副詞的表現[3]である様態の副詞的表現，および，結果の副詞的表現について情報構造における特性を検討し，副詞的表現の情報構造上の特性が語順にも影響を与えることを論じる。様態および結果の副詞的表現は文に対して任意的な要素である点で共通しており，心理言語学的な語順の検討（小泉・玉岡2006）では，様態お

---

[1] Characteristics of manner and resultative adverbials on information structure

[2] NAMBA Emi (Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, Nagoya, Japan, E-mail: eemm826@gmail.com)

[3] 本研究では副詞的表現および副詞を *Adv* と表記することがある。

よび結果の副詞的表現で[主語−副詞−目的語−動詞]（以下，S*Adv*OV）と[主語−目的語−副詞−動詞]（以下，S*Adv*OV）の2つの語順が基本語順であると認定されている。小泉・玉岡（2006）で刺激となった副詞的表現を対象に大規模コーパス検索により様態と結果の副詞的表現の基本語順を計量的に検討した難波・玉岡（2016）では，様態の副詞的表現が先に挙げた2つの語順（S*Adv*OV，SO*Adv*V）に同程度分布していたのに対して，結果の副詞的表現は8割がS*Adv*OV，つまり，動詞の前に多く生起していたことが分かった。本研究では，難波・玉岡（2016）の副詞的表現の分布の差について，それらの副詞的表現の情報構造上の特性を明らかにし，文における副詞的表現の分布を説明することを試みる。

2. 副詞的表現と語順および統語構造

本研究では動作の様態を表す様態の副詞的表現および，動作の結果の対象の状態を表す結果の副詞的表現を対象にする。これらの副詞的表現には文中に生起可能な位置が複数認められる。そうではあるが，副詞的表現間の相対的な位置関係からおおよその生起位置が把握されている（野田 1984）。野田（1984）の研究は副詞的表現間の階層や主語や目的語といった文成分との語順を論じたものである。野田（1984）より，副詞的表現にはしかるべき生起位置があり，その生起位置はある文要素や文構成単位との関係を示唆するものであるが，語順についての論考であるため野田（1984）の知見から直接副詞的表現の統語構造を導くことはできないと思われる。

統語論的には副詞的表現は非必須成分であり，付加詞と呼ばれる要素として位置づけられる。主語や目的語が動詞の表す意味を完結させるために要求される要素であるのに対して，副詞的表現は付加的な周辺的要素である。副詞的表現は文構成要素として周辺的なものであるが，小泉・玉岡（2006）は理論言語学的検討による副詞的表現の位置を心理言語学的検討により裏付けている。小泉・玉岡（2006）では，Koizumi（1993）の統語的位置に基づく副詞の3分類（MP 副詞，IP 副詞，VP 副詞）に対し，副詞の陳述の副詞（MP 副詞），時の副詞（IP 副詞），様態の副詞（VP 副詞），結果の副詞（VP 副詞）の4種類の副詞について，副詞を一つ含む文を作成し，作成した文における副詞の位置を変え文の正誤判断課題を課し，正誤判断に要する反応時間を計測した。4種いずれかの副詞を含む文の正誤判断課題の結果，表1の語順が他の語順よりも反応時間が有意に短いことがわかり，それぞれの副詞の基本語順であると認められた。小泉・玉岡（2006）では統語論上の副詞の分

類と具体的な副詞の生起語順が文解析によっても実証されたことを示したが，時の副詞，様態の副詞，結果の副詞には基本語順を2つ認める結果になっている。

表1　小泉・玉岡（2006）で認められた副詞の語順

統語的位置	副詞の種類	基本語順	文例
MP 副詞	陳述	*Adv*SOV	あいにく太郎が学校を休んだ。
IP 副詞	時	*Adv*SOV	今日次郎が髪を切った。
		S*Adv*OV	太郎が昨日花瓶を壊した。
VP 副詞	様態・結果	S*Adv*OV	次郎がすばやく靴下を洗った。
		SO*Adv*V	太郎がグラスをこなごなに割った。

難波・玉岡（2016）では小泉・玉岡（2006）の様態と結果の副詞的表現を参考に新聞コーパスを用い，目的語を伴う他動詞と共起した場合の副詞的表現が現れる位置を数えた。小泉・玉岡（2006）は文理解の側面から副詞の基本語順を検討したものであるといえるが，難波・玉岡（2016）は新聞コーパスに基づいており，産出された言語資料から副詞的表現の基本語順を検討した点に違いが見られる。難波・玉岡（2016）では，様態の副詞的表現 23 語，結果の副詞的表現 17 語の文中に表れる位置を数えた結果，表2のような分布の実態が見られた。様態の副詞的表現が目的語の前後に同程度の割合で現れていたのに対し，結果の副詞的表現は目的語のあと，すなわち，動詞の前に8割が表れていたことが分かった。難波・玉岡（2016）では様態と結果の副詞的表現の分布の差を副詞的表現と動詞の共起関係の違いであると考察している。

表2　目的語を含む他動詞文と共起した場合の副詞的表現の語順と割合
（難波・玉岡 2016　表2）

	*Adv*SOV		(S)*Adv*OV		(S)O*Adv*V	
副詞の種類	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
様態（*N*=23）	114	1.6	3,288	48.4	3,398	50.0
結果（*N*=17）	15	1.3	202	18.0	908	80.7

3. 本研究の課題

2節では副詞的表現の語順に関するいくつかの研究を概観した。野田（1984）から副詞的表現の階層性があることが示され，小泉・玉岡（2006）および難波・玉岡（2016）では文理解と産出における副詞的表現のとる語順の傾向を示した。そして，難波・玉岡（2016）は産出における様態と結果の副詞的表現の分布が異なることを示している点で注目される。文理解では様態と結果の副詞的表現は同じ語順を基本とする結果であったのに対して，産出では様態の副詞的表現は文理解と同じ基本語順（S*Adv*OV，SO*Adv*V）を認めたが，結果の副詞的表現は基本語順が1つ（SO*Adv*V）に絞られる点で異なっていた。この違いは，文理解による認知的手法と言語資料であるコーパスを用いたことによる方法論的な手法のちがいにより生じたものだと思われる。ところで，文の産出は聞き手への伝達を前提に行われるのが一般的である。ノートやメモのように産出した側と受け取る側が同一人物である場合もあろうが，そのような場合においても産出した側・受け取る側が存在し，両者が同一であるということに過ぎない。つまり，副詞的表現は付加的な要素であるとはいえ，出現する限り何らかの情報伝達機能を担っていると考えられる。副詞的表現の分布を考えるにあたり，副詞的表現がどのような情報構造上の特性を有するかを説明することが必要で，副詞的表現の情報構造上の特性により，産出された文における分布の違いを情報構造の側面から説明できるのではないかと思われる。よって，本研究は副詞的表現，なかでも様態と結果を表す2種類の副詞的表現について，それらが有する情報構造上の特性を捉えることを課題とする。

4. 日本語の情報構造と省略可能性

3節で述べたように，本研究では副詞的表現の情報構造上の特性の記述を試みる。その前に，以下に本研究で分析する情報構造の枠組みについて述べる。

情報構造について述べる際，新情報（未知）や旧情報（既知）といった捉え方（角田 1991，カレル 2000，松本 2006）がされることがある。新情報・旧情報といった区別は文の中での情報の流れを表し，一般的に旧情報を提示してから新情報が述べられる（松本 2002）。そして，情報の重要度という考え方もある（神尾・高見 1998）。文を旧から新への流れと捉えることと情報の重要度の高低は異なった考え方であり，新情報・旧情報が聞き手に対して既知か未

知であるかという対立を意味し，情報の重要度とは他の文構成要素に対して伝達機能上の相対的重要度の高低の対立を意味する。さらに，情報の重要度はある2つの情報が聞き手にとって未知のものでも2つの情報の間には重要度の差が存在しうる（神尾・高見 1998）。なお，情報構造は文構成素間の「情報価値」の配列ともいわれる（カレル 2000）。

神尾・高見（1998）は文構成要素の省略を用いた次の議論をしている。神尾・高見（1998）では日本語の順向省略について（1）のような仮説を立て，日本語は動詞の前は最も重要度の高い情報が置かれる位置であるとしている。なお，順向省略とは目的語を省略するとき重複する2回目の目的語を省略することである（太郎は[その映画俳優を]尊敬し，花子はφ批判した（神尾・高見 1998（4a））。また，（2）が日本語の基本語順であるとし，（3a）のように動詞の前にない要素は省略できるが，（3b）のように動詞の前は最重要の情報なので省略することができない。しかし，（3c）のように動詞の前であるにもかかわらず省略できる場合もある。動詞の前の要素を省略した（3c）が正文として認められるのは，付加語と補語の相対的重要度は一律には決められるものではなく，（2）で示した基本語順と同じ配列であれば動詞の直前ではない付加語の方を重要度が高いと考えることもできるためである。つまり，（2）の基本語順に従うもので，付加語の方を重要度が高いとする場合には動詞の前であってもより重要度の低い補語の方を省略できる。そして厳密に言えば，（3b）が非文であるのは動詞の前が省略できないからということよりむしろ，（3b）の語順は[主語―補語―付加語―動詞]であり，（2）の基本語順とは異なる。基本語順を変えて付加語を動詞の前に持ってきている以上，付加語の方が重要度が高いと解釈され，（1）の仮説に反し非文法的になるという。（3d）では基本語順（（2））であり付加語の方が補語より重要度が低く解釈されているため省略されていると考えることができる。

（1）　日本語の順向省略に対する機能論的制約：日本語の順向省略において省略できる要素は，残された要素より情報の重要度が低いものでなければならない。（神尾・高見 1998（47））

（2）　日本語の基本語順

[$_S$ 主語・・・付加語・・・補語・・・動詞]（神尾・高見 1998（60））

（3）　a．　太郎は次郎を「兄貴」と呼び，正雄はφ「親分」と呼んだ。

（神尾・高見 1998（56a））

b.＊ 太郎はハムレットを図書館で読み，次郎はリア王をφ読んだ。

（神尾・高見 1998（58a））

c． 太郎は図書館でハムレットを読み，次郎は研究室でφ読んだ。

（神尾・高見 1998（59a））

d． 太郎は図書館でハムレットを読み，次郎はφリア王を読んだ。

（神尾・高見 1998（61a））

神尾・高見（1998）の議論をまとめると，基本語順であれば省略できるのは付加語，補語といった文構成要素の種類によるのではなく，動詞の前か否かといった位置的条件でもなく，重要度が相対的に低いものであるかどうかが基準となるといえる。また，基本語順でない語順であれば，動詞の前の要素が最重要情報になるため省略できない。

神尾・高見（1998）の議論は副詞的表現を含む文の情報構造上の特性を検討する上で非常に有益な理論的枠組みであると考える。つまり，語順の操作と省略可能性をテストすることでどのような場合に省略できるのか，できないのかを把握することができ，様態と結果の副詞的表現の情報構造上の特性を捉えられると考えられる。そして，難波・玉岡（2016）で結論付けられた副詞的表現の基本語順について，情報構造上の特性により説明ができるのではないかと思われる。つまり，副詞的表現の情報構造上の特性を検討するにあたり，次のような予測が立てられる。

本研究の予測：（2）の基本語順（S*Adv*OV）において，*Adv*もOも省略できる場合，*Adv*とOは重要度が相対的に決まるといえる。このとき，副詞的表現の情報構造からみた基本語順はS*Adv*OVであるということができる。そして，SO*Adv*Vのときは*Adv*が省略できないはずである。

上記の予測は語順操作と省略操作により副詞的表現の情報構造上の特性が捉えられ，副詞的表現の分布の説明に寄与できると思われる。

5. 副詞的表現と省略

前節では日本語他動詞文における省略可能性を概観し，本研究の課題となる副詞的表現の情報構造上の特性が捉えられることを述べた。本節では，S*Adv*OV と SO*Adv*V の2つ

の語順に対して副詞的表現と目的語がどのような場合に省略できる，できないかを観察することで副詞的要素が情報構造上どのような特性を持つのかを実際に観察してみる。

(4) 様態の副詞的表現

(A) 太郎は熱心に木を植え，
- a． 花子はφ花を植えた。
- b． 花子は楽しくφ植えた。

(B) 太郎は木を熱心に植え，
- a． 花子はφ楽しく植えた。
- b． 花子は花をφ植えた。

(C) 太郎はちびちびお茶を飲み，
- a． 花子はφ水を飲んだ。
- b． 花子はごくごくφ飲んだ。

(D) 太郎はお茶をちびちび飲み，
- a． 花子はφごくごく飲んだ。
- b． 花子は水をφ飲んだ。

(5) 結果の副詞的表現

(A) 次郎は赤くシャツを染め，
- a.?? 洋子はφスカートを染めた。
- b． 洋子は白くφ染めた。

(B) 次郎はシャツを赤く染め，
- a． 洋子はφ白く染めた。
- b.?? 洋子はスカートをφ染めた。

(C) 次郎はＵ字に針金を曲げ，
- a.?? 洋子はφ鉄を曲げた。
- b． 洋子はＬ字にφ曲げた。

(D) 次郎は針金をＵ字に曲げ，
- a． 洋子はφＬ字に曲げた。
- b.?? 洋子は鉄をφ曲げた。

表3 (4)(5)の語順と省略要素のまとめ

	情報構造の配列			
	SAdvOV		SOAdvV	
	*Adv*を省略	Oを省略	Oを省略	*Adv*を省略
様態の副詞的表現	4Aa	4Ab	4Ba	4Bb
	4Ca	4Cb	4Da	4Db
結果の副詞的表現	??5Aa	5Ab	5Ba	??5Bb
	??5Ca	5Cb	5Da	??5Db

表3は（4）（5）の語順と省略要素，容認性についてまとめたものである。様態の副詞的表現の（4）について，S*Adv*OV であるものは（4AC），SO*Adv*V であるものは（4BD）で，前者も後者も動詞の前の要素と動詞の前でない要素の両方が省略できることが分かった。一方で結果の副詞的表現の（5）についてS*Adv*OV であるものは（（5AC）），SO*Adv*V であるものは（5BD）であり，語順に関わらず *Adv* を省略したもの（（5Aa，5Ca，5Bb，5Db））は他のものに比べて容認性が下がることが分かった。

6．2種類の副詞的表現の省略

前節では副詞的表現を含む他動詞文について，並列文の第2文における副詞的表現及び目的語が省略可能かどうかをテストした。4節では語順によって省略可能性と容認性が変わると予測したが，様態の副詞的表現は語順を変えても容認性が大きく変わることはかなった。一方で，結果の副詞的表現は語順を変えても容認性が下がるものが見られた。本節では，（4）（5）それぞれの副詞的表現について結果を考察する。

6.1 様態の副詞的表現

様態の副詞的表現では語順を変えても容認性が下がらなかった。このことより，様態の副詞的表現の省略可能性をテストした（4）では，S*Adv*OV，SO*Adv*V の語順にも関わらず *Adv* とO について *Adv*の方を重要度を高く捉えることも（（4Ab，4Ba，4Cb，4Da）），O の方を重要度を高く捉えることも可能であるといえる（（4Aa，4Bb，4Ca，4Db））。また，いずれの語順においても動詞の前の要素を省略して文法性が下がるものはない。つまり，語順を変えても動詞の前の要素が省略できるということは，様態の副詞的表現は語順に関わらず，常に目的語と相対的に重要度が決定されると考えられる。つまり，情報構造からみた様態の副詞的表現の基本語順は2つあると考えることになる。

語順を変えても省略可能性に差異が見られないことは，他動詞文において様態の副詞的表現も目的語も情報構造から見れば，情報構造上文の成分として常に同質に扱われているのではないかと考えられる。このことは難波・玉岡（2016）で観察された様態の副詞的表現の分布，言い換えると，様態の副詞的表現が目的語の前後に同程度表れていたことを支持するものであるといえる。すなわち，基本的には神尾・高見（1998）が述べるように日本語では動詞の前に置かれるものは情報の重要度が高い要素であり，様態の副詞的表現と

目的語が情報構造上同質の要素であれば，様態の副詞的表現と目的語のどちらに重要度を置くかは書き手の判断次第である。(4)で S*Adv*OV と SO*Adv*V の語順において省略できるものが動詞の前の要素でも動詞の前でない要素でも文法的であったことより，様態の副詞的表現も目的語も本来的には情報の重要度に差があるわけではないと考えられるため，様態の副詞的表現の生起位置は書き手のとらえ方に依存する。つまり，書き手が出来事をどう捉え，書き手によりどちらに情報の重要度の重きを置くかが決められる。書き手のとらえ方は恣意性が高いということができ，この恣意性の高さが生起位置の頻度に反映されていると見ることができるのではないかと思われる。

6.2 結果の副詞的表現

結果の副詞的表現の省略可能性を検討した(5)ではいずれの語順においても容認性が下がるものが見られた。これより，結果の副詞的表現と目的語の情報の重要度は様態の副詞的表現のように相対的に決まるものではないと判断できる。語順が SO*Adv*V のとき((5BD))動詞の前の結果の副詞的表現を省略すると容認性が下がる((5Bb，8Db))。4節の予測より，S*Adv*OV が結果の副詞的表現の基本語順であると判断できそうである。もし S*Adv*OV の語順が結果の副詞的表現の基本語順であれば，動詞の前の要素も動詞の前でない要素も省略できるはずである((5A)(5C))。しかし，S*Adv*OV 語順において動詞の前でない結果の副詞的表現を省略した(5Aa)(5Ca)は容認性が下がる。(5Aa)(5Ca)の容認性の低さは S*Adv*OV 語順も基本語順ではないことを示唆する事実である。神尾・高見(1998)に則ると，付加語(副詞的表現)と目的語(補語)の両方に重要度を高くすることができるので，基本語順であれば動詞の前の要素の重要度を高くし，動詞の前でない要素を省略することもできる。また，基本語順であれば動詞の前でない要素の重要度を高くすることもでき，動詞の前であっても省略できると考えられている。つまり，SO*Adv*V 語順において(5B)(5D)で動詞の前の結果の副詞的表現が省略できないからといって((5Bb)(5Db))，S*Adv*OV を結果の副詞的表現の基本語順とすると，動詞の前でない要素(*Adv*)を省略できない事実((5Aa)(5Ca))から S*Adv*OV が基本語順であるとも言えなくなる。ということは，結果の副詞的表現は情報構造上における基本語順がなく，コーパス検索で約8割が動詞の前に生起していたこととは関係がないのだろうか。次節ではより詳細に，結果の副詞的表現が情報構造上どのような要素であるのかを検討していきたい。

6.2.1 結果の副詞的表現の情報の重要度

先に本研究の結論を述べると，結果の副詞的表現は情報構造からみて様態の副詞的表現と同様の付加的要素ではなく，絶対的に重要度が高く，動詞に次ぐ述語的情報を担う付加的要素であると考える。

（5）の例を見ると，文法性が下がる文は，並列文の第1文には結果の副詞的表現も目的語が表れ，第2文には目的語のみが表れている文である。つまり，語順に関わらず文法性が下がるのは結果の副詞的表現が省略される場合であることがわかる。これより，結果の副詞的表現の情報の重要度は様態の副詞的表現とは異なり，目的語に対して相対的に決まるものではなく，他の要素（項，副詞的表現）に対して情報構造における重要度が絶対的に高いものであることが示唆される。

まず，結果の副詞的表現の情報構造上の特性を分析するにあたり，結果の副詞的表現が担う文構造上の役割について改めて述べる。結果の副詞的表現とは，二次述語と呼ばれるものであり，日本語では動詞に含意される対象（目的語）の変化状態を表す要素である。英語が動詞の意味に関わらず様々な二次述語を伴い，結果構文として多様な文を生産できるのに対して，日本語では結果の二次述語は動詞の意味に依存し，二次述語は動詞が含意する意味の詳細を規定する（影山 1996，松井・影山 2009）。これより，結果の副詞的表現はもともと動詞に含意される意味を具体的に述べるものなので，並列文の第1文に表れることで第2文に対して対比の意味や類似した形式が用いられることが期待されると思われる。つまり，結果の副詞的表現が第1文に表れることで第2文の結果の副詞的表現に対して期待が大きくなる結果，絶対的に結果の副詞的表現の情報の重要度が高くなる。しかし，第2文に結果の副詞的表現が現れない場合，第1文との間に情報の非対称性が生じるため文法性が下がるのではないかと考える。（6）のように最初に副詞的表現が提示されない場合は認知的に第2文に対して対比を期待しないので，第2文のみに結果の副詞的表現が表れても（5Aa）（5Ca）などに比べると文法性は若干改善するが，やはり文全体としては第1文と第2文での情報の非対称性のため据わりの悪さが残る。結果の副詞的表現を含む並列文において語順に関わらず，第1文に結果の副詞的表現が表れるならば，第2文でも同程度の情報を提示し，第1，2文の情報量を左右対称にする必要があるといえる。語順に関わらず結果の副詞的表現を省略できないことは結果の副詞的表現の情報の重要度が他の要素と相対的に決まるものでなく，絶対的に高い重要度を持つためであると考えられる。

(6)　a.? 次郎はシャツを染め，洋子はスカートを白く染めた。
　　b.? 次郎は針金を曲げ，洋子は鉄をＬ字に曲げた。

6.2.2 結果の副詞的表現の情報構造における位置づけ

6.2.1 では結果の副詞的表現が語順に関わらず絶対的な情報的重要度を持つと考えた。本節では，絶対的に高い重要度を持つ結果の副詞的表現が情報の流れにおいてどのようにふるまうのかを述べる。結果の副詞的表現の意味的役割は，一般的に，状態変化が起こった対象の状態を述べることで，構文成分としては必須要素ではなく変化状態を詳述する点で様態の副詞的表現と同様に付加詞的要素のように思われる。しかし，山田(1908)が述べているように，結果の副詞的表現は動詞に対して従属的な要素ではなく，動詞と対等に述語となる(同格連用)とも捉えられる。現代日本語では「コップを粉々にする(＝コップを割る)」「壁を赤くする(＝壁を塗る)」のように，「結果の副詞的表現＋する」で状態変化動詞を用いずとも特定の状態への変化を表すことができる。このように結果の副詞的表現に動詞化接辞「～する」が付加し動詞として機能することより，山田(1908)の指摘は支持されると思われる。このことを考慮すると，結果の副詞的表現が動詞のような性質を有している可能性があり，情報構造上も動詞に近い性質を持っていると推測される。

これまで示してきた省略は全て目的語や副詞的表現を省略する(同一要素が並列する場合2回目を省略する)順行省略であった。省略には，もう一つ，逆行省略と呼ばれるものがある。逆行省略とは，並列文において動詞が重複する場合，第1文の動詞を省略し，第2文の動詞を残す省略である。(神尾・高見 1998)。(7)では，第1文と第2文で動詞が共通する場合，第1文と第2文どちらの動詞を省略するかを示すもので，(7b)ように動詞の場合は第1文において省略が起こる。神尾・高見(1998)では，日本語の動詞の省略が逆行省略であることについて，日本語が SOV 語順であるため，第1文と第2文の共通要素としての動詞を取り出し，文末に配置する(7c)のような認知的操作が起こっていると述べられている。つまり，並列文で動詞が重複する場合，日本語は動詞が文末に起こる要素なので共通項として取り出された動詞は文末に配置され，逆行省略が生じる。

(7)　a.＊ 太郎はハムレットを読み，花子はリア王をφ。(神尾・高見 1998(2b))
　　b.　太郎はハムレットをφ，花子はリア王を読んだ。(神尾・高見 1998(2c))
　　c.　[太郎はハムレットを，花子はリア王を]読んだ。＝[SO, SO]V

（神尾・高見 1998（6b））

動詞の省略可能性をテストしてみると，結果の副詞的表現を含む文（(8)(9)）と付加語を含む文（(10)(11)）では解釈に差が見られる。(8)(9)では「白く」「L 字に」がスカート，鉄のみを指すことは考えづらく，直観的にシャツもスカートも「白く」なったこと，針金も鉄も「L 字に」なったと解釈され，動詞だけでなく結果の副詞的表現も一緒に抜き出される（8a)(9a)の解釈が優勢であるように思われる。結果状態が異なる場合は第1文と第2文で対照的な状態である場合には動詞のみの取り出しも可能である（(8Cf)(9Cf)）。一方，付加語を含む文では解釈に曖昧さが見られる。太郎も花子も「フォークで」食事したことも，「10 時に」ある場所へ行ったとする解釈も（(10a)(11a)），花子のみが「フォークで」食事したこと，「10 時に」図書館へ行ったとする解釈もできる（(10b)(11b)）。また，太郎も花子も異なる道具・時間に食べたこと，行ったことも表せる（(10Cf)(11Cf)）。

(8)　次郎はシャツをφ，洋子はスカートを白く染めた。
　a．［次郎はシャツをφ，洋子はスカートを］白く染めた。
　b.＊［次郎はシャツをφ，洋子はスカートを白く］染めた。
　Cf.［次郎はシャツを赤くφ，洋子はスカートを白く］染めた。

(9)　次郎は針金をφ，洋子は鉄をＬ字に曲げた。
　a．［次郎は針金をφ，洋子は鉄を］L 字に曲げた。
　b.＊［次郎は針金をφ，洋子は鉄をＬ字に］曲げた。
　Cf.［次郎は針金をＵ字にφ，洋子は鉄をＬ字に］曲げた。

(10)　太郎は魚をφ，花子は肉をフォークで食べた。
　a．［太郎は魚をφ，花子は肉を］フォークで食べた。
　b．［太郎は魚をφ，花子は肉をフォークで］食べた。
　Cf.［太郎は魚を箸でφ，花子は肉をフォークで］食べた。

(11)　太郎は学校にφ，花子は図書館に 10 時に行った。
　a．［太郎は学校にφ，花子は図書館に］10 時に行った。
　b．［太郎は学校にφ，花子は図書館に 10 時に］行った。
　Cf.［太郎は学校に 9 時にφ，花子は図書館に 10 時に］行った。

(10)(11)の付加語が動詞と取り出せるのか，取り出せないのか曖昧であるのに対して，(8)(9)の結果の副詞的表現は問題なく動詞と取り出せ，むしろ取り出さない解釈は困難である。結果の副詞的表現を動詞と取り出すことについて，動詞のみを取り出すと，先に述べた情報の非対称性が□内に生じるためであると考えられる。つまり，動詞の省略において，結果の副詞的表現は動詞とともに省略対象であり，共通項の動詞とともに取り出せる要素であるといえる。(10)(11)で付加語が取り出せるのか取り出せないのか判断しかねるが，結果の副詞的表現は動詞とともに取り出す解釈が優勢なことより，標準的に取り出し可能な要素である動詞と同様の情報的価値があるのではないかと考える。語彙的に見ると，結果の副詞的表現は動詞の意味が具体化したものであり動詞の意味に依存する成分であるが，山田(1908)が動詞に対して「同格連用」と述べたように，情報構造上では動詞のような述語的情報を担うと見られる。すなわち，結果の副詞的表現は動詞的な述語情報を担う特性のために，動詞とともに省略，取り出しが自然に起こると考えられる。

6.2.3 結果の副詞的表現と省略についてのまとめ

結果の副詞的表現について情報構造の観点から6.2.1と6.2.2をまとめると次のことが言える。結果の副詞的表現は語順に関わらず並列文において省略されると容認性が下がる。この容認性の低下は結果の副詞的表現が第1文のみに表れ第2文に現れない場合，第1，2文の間に情報の非対称性が生じるためである。結果の副詞的表現が省略できない要素であることより，他の要素に対して絶対的に情報の重要度が高いことが考えられる。そして，結果の副詞的表現は述語的情報を担う特性を持つ点でも様態の副詞的表現などの付加語と異なることがわかった。動詞の省略は並列文において第1文と第2文の動詞を共通項として取り出す操作により説明される(神尾・高見 1998)。結果の副詞的表現は動詞とともに文末に取り出すことができ，その時の解釈は第1文，第2文両方にかかるのが自然である。このように結果の副詞的表現が動詞とともに第1文で省略対象となり，文末において第1文にもかかる要素であることは，結果の副詞的表現に動詞相当の情報的価値があることを認める根拠になると思われる。つまり，文成分としての役割は異なるが情報構造上では結果の副詞的表現も動詞のような述語的情報を担っていると考えられる。

以上の議論を踏まえると，結果の副詞的表現は様態の副詞的表現や他の付加語とは性質の異なったものであると考えることができる。そして，結果の副詞的表現は情報の重要度が絶対的に高く，動詞相当の述語的情報有することを認めることができる。また，情報構造

は，情報の重要度が低いものから高いものへと流れるとされており（久野 1978），SOV 語順である日本語の動詞文の文末は動詞が起こる位置である。つまり，他動詞文において SOV 語順に従い動詞が文末に起こるが，絶対的に情報の重要度が高く，述語的情報を担う結果の副詞的表現が動詞の前に生起することは日本語が SOV 語順であることを反映していると思われる。

省略操作を行ったことで結果の副詞的表現が取りうる語順について次のことがいえる。結果の副詞的表現が様態の副詞的表現のように付加語，目的語の省略可能性によって基本語順を導くことができないのは，結果の副詞的表現が持つ情報構造上の特性によるもので，付加語のように情報の重要度の高低が相対的に決まるものではないためであると考えられる。結果の副詞的表現が並列文において省略できない背景には結果の副詞的表現は絶対的に重要度が高く，動詞相当の述語的情報を有し，これより，動詞に次いで情報的価値が高い要素であることが指摘できる。日本語では動詞が文末に置かれるので，重要度が高く述語的情報が認められる結果の副詞的表現が動詞の前に生起するのは日本語の他動詞文が SOV 語順であることを反映した自然なことといえ，このことは難波・玉岡（2016）のコーパス検索でも結果の副詞的表現の用例のうち約8割で，結果の副詞的表現が動詞の前に表れていたことに対する情報構造の観点からの説明になりうるのではないかと思われる。

7．本研究のまとめ

本研究では産出された文つまり，受け手への情報伝達を前提とした文における様態と結果の副詞的表現について，並列文における省略可能性により副詞的表現の情報構造における特性を捉えようとした。

4節では語順と省略可能性についての予測を立て，5節で副詞的表現の並列文における省略を観察した。その結果，様態の副詞的表現は語順を変えても動詞の前の要素を省略できることが分かった。つまり，情報構造上でも基本語順を2つ認めたことを支持できると思われる。様態の副詞的表現が情報構造上有する重要度は常に目的語と相対的に決められるものであると考えられ，様態の副詞的表現の情報構造上の特性であるといえる。様態の副詞的表現は目的語と相対的に情報の重要度が決まると考えると，様態の副詞的表現と目的語のどちらを情報の重要度が高いとするかは書き手に依存することになる。書き手の判断は極めて主観的かつ個人的であり，恣意性が高いものである。よって，様態の副詞的

表現の情報の重要度が書き手の恣意性に依存すると考えることで，難波・玉岡（2016）のコーパス検索における様態の副詞的表現の分布が目的語の前（S*Adv*OV），動詞の前（SO*Adv*V）に同程度見られたことに対して情報構造の観点からの説明になると思われる。

一方で結果の副詞的表現は語順に関わらず省略することができず，様態の副詞的表現とは異なった情報的特性を持つ。結果の副詞的表現は並列文において省略することができないのは第1文と第2文の情報の対称性を保障するためであり，絶対的に情報の重要度が高い要素であると考えられる。そして，結果の副詞的表現は動詞の省略（逆行省略）において，動詞とともに共通項として取り出すことが可能であることがわかった。つまり，結果の副詞的表現は動詞相当の述語的情報を担う要素であると考えられる。結果の副詞的表現が省略対象にならないこと，動詞とともに文末に取り出せることより，結果の副詞的表現の情報構造上の特性は，情報の重要度が絶対的に高く，動詞相当の述語的情報を担っていることであるといえる。また，情報の流れは情報の価値が低いものから高いものへ流れる。日本語は SOV 語順で文末は動詞が起こる位置であることより，動詞の前に情報的価値の高く述語的情報を担う結果の副詞的表現が生起することは自然なことであり，これより，コーパス検索で結果の副詞的表現が動詞の前に多く生起していた事実が説明できると思われる。結果の副詞的表現を含む用例の中で約2割は目的語の前に生起していたが，全体として動詞の前に生起する傾向を示すのは結果の副詞的表現の情報構造上の特性によるものであると考えられる。

[参考文献]

影山太郎（1996）『動詞意味論―言語と認知の接点―』くろしお出版.

神尾昭雄・高見健一（1998）『談話と情報構造』研究社.

カレル・フィアラ（2000）『日本語の情報構造と統語構造』ひつじ書房.

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店.

Koizumi, Masatoshi（1993）Modal phrase and adjuncts. Japanese/Korean Linguistics 2, pp.409-428.

小泉政利・玉岡賀津雄（2006）「文解析実験による日本語副詞類の基本語順の判定」『認知科学』13(3), pp.392-403.

角田多作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版.

難波えみ・玉岡賀津雄（2016）「コーパス検索による様態と結果の副詞の基本語順の検討」『言語研究』150, pp.173-181.

野田尚史（1984）「副詞の語順」『日本語教育』52, pp.79-90.

松井夏津紀・影山太郎（2009）「第8章　副詞と二次述語」影山太郎（編）『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店, pp260-292.

松本克己（2006）『世界言語への視座　歴史言語学と言語類型論』三省堂.

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館.